
まほろばから君を呼ぶ

北見滝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほろばから君を呼ぶ

【Nコード】

N0719Y

【作者名】

北見滝

【あらすじ】

優しい世界は悲しいからくりで動いていた。

その事に気付いてしまった少年少女達のそれぞれの選択。

零

いったい、いつから掃除をしていないのだろう。燈火はかび臭い部屋の中でぼんやりと思いをはせた。幼いころに幾度となくこの部屋に遊びに来ていたころは、割と小奇麗な印象だったのだが。

「コホッ」

日の光の届かない薄暗い部屋の中は埃っぽく少し喉が痛む。カーテンレールに積もった埃は、もう長い間カーテンが開けられなかったことを言外に示していた。適当にごみ袋に突っ込まれたコンビニ弁当の容器とペットボトル。床とベッドには脱ぎ散らかされた洋服と、読み散らかされた雑誌が散乱している。

……きつとこの部屋は匂うのだろう、キツイ匂いの芳香剤が置いてあった。

部屋の隅には山のように積まれたキャンバスの山。全く何も書かれていないもの、真っ黒の意塗りつぶされたもの、途中でやめたと思われるもの、切り刻まれているもの、へし折られているもの、燃やそうとしたのか半分焦げたもの。積み上げられ、打ち捨てられたそれらは独特な圧迫感があり、燈火はなるべくそれらを視界に入れないようにしていた。

それでもこの左目が見たくもないものを見てしまう。

ズキリと左目の奥に鈍い痛みが走る。

あまりの痛みにくめかみに手を添える。

グラリと目の前の景色がぶれる。

『見たくない』と左目を強く閉じる。

しかし、わずかに遅かった。瞼の裏にさつきほど見てしまった景色の残像が浮かび上がる。

薄暗い部屋の中、この部屋の主が首を吊っている。

燈火は喉からせり上がってくる吐き気におもわず顔をしかめた。

数分間、宙で静止していた絵筆は一度もキャンバスをなぞることなく、パレットの上に置かれた。周りには誰もいない。校庭からわずかに聞こえてくる喧騒と、単調な時計のリズムが美術室の静寂を強調していた。

遅々として進まない描きかけの絵を前にして九条周はそっと吐息を吐く。

何故だろう？　今まで絵を描くことで躊躇することなどなかったのに。なぜか筆を進める気になれない。納得がいかない部分があるわけではない。自覚はしている。これは気持ちの問題だ。だけど、理由がわからない。

軽い気持ちで描き始めたこの絵に、なにか、嫌悪感にも似た感情が付きまとう。自分の体の目の届かない場所に、大きな傷跡を見つけたような感じ。一度認識してしまえば意識せざるを得ない、そんな気分。

「……ん————」

同じ姿勢を維持していたせい、背中が少し硬くなっていた。両手を挙げて思いつきり体を伸ばす。ミチミチと背中のスジが伸ばされ、痛みと共に疲労が霧散していく。どうせならこの心のしこりも一緒に解消したい。けど、まあ、それはこの絵を納得のいく完成品として仕上げる他には無さそうだ。リフレッシュ終了。周は再び絵筆を手に取り、キャンバスと対面した。

キャンバスの中には見慣れた風景。暖かい色調から染み出てくる微かな絶望。

やはり、筆が迷う。桃色の筆先が虚空をなぞる。拭いきれない嫌悪感を塗りつぶそうにも、発信源がわからない。

周は小さく舌打ちをした。どうやら長期戦になりそうだ。本腰を入れて、この絵の修正箇所を特定するのが先らしい。それがわかる

までは絵筆の出番は無さそうだ。周は絵筆をパレットの上に放り投げ、さて、どうしたものかと目の前のキャンバスにいつものように意識を集中させる。

「相変わらず、絵を描いているあんたの姿は————、何というか不気味ね」

いきなり後ろから聞き慣れた声で失礼な台詞を浴びせられた。もともと周にとって、この台詞はもう何度も聞かされてきたものだったので、特に不機嫌になることも無く後ろを振り向き、声の主に視線を投げる。

瞬間、世界が赤く塗りつぶされた。

放課後の美術室は、窓から差し込む夕日の光によって赤く染め上げられている。いつの間にか窓際に立っていた彼女の顔は、夕日の逆光によりシルエットが浮かび上がっている。光と影のギャップが激しいのか、彼女の顔は黒く塗りつぶされたような深い洞のようで、表情が判然としない。

周はあまりの眩しさに軽い頭痛を覚え、目を閉じた。視界の暗転。暗幕のようなまぶたの裏で、さっきまで見ていた景色が残像のようにこびり付いている。

夕日を背負っていた彼女。クラスメートで幼馴染でもある彼女の姿が、一瞬で全く人物に変化した。うずくまって大声で泣く小さな少年。色素の薄い赤みをおびた髪の毛、左目を覆う眼帯が痛々しい。周にとって全く見覚えのない少年。だけど不思議と少年の泣き声は、周の胸を執拗に締め付けてきた。

「……？」

わずかな疑問はあったが、周は恐る恐る目を開ける。目の前には先ほどの声の主、クラスメートでもあり幼馴染でもある巡紫月の勝気な顔があった。

「なによ？ 人の顔をまじまじと見ちゃって？ もしかして顔に何かついている？」

周の探るような視線が気になる。この男がするにしてはおかしな表情だ。

さっき教室で食べた菓子パンの食べかすが口元についているのか知らん？

乙女の常識として、手鏡で自分の顔をチェック。うん、大丈夫。

ざっとメイクに崩れがないかを確認して周に向き合う。

おや？ 表情がいつもと同じ、したり顔のにやけ面に戻っていやがる。

「いや、大丈夫だ。いつも通り面白いぞ」

何だこの野郎。

「あら、ありがとう。お礼にあんたの顔を笑えなくしてやるわ」

両目をスツと細くして不機嫌な表情を表に出し、わざとゆっくり歩いて周に近づいていく。手がギリギリ届かない距離でいったん停止。おもむろに周から視線を外し、彼の描きかけのキャンバスの隅に置かれているものにピントを合わせた。

私が注視しているものを見て周が慌てて立ち上がる。

「さて、落ち着け、紫月たん。そんな目でペインティングナイフを見るな。あれは絵の具に対して使うものであって、決して人に向けるものではないぞ！ はい！ 大きく深呼吸ー」

さっきまでの余裕たっぷりのにやけ面も完全に消え失せ、周は微妙に引きつった笑顔を披露している。正直、いい気味であるが、乙女の顔を面白いと表現した罪を償えるほどではない。

しかし、周は大きな勘違いをしている。ペインティングナイフは一応ナイフの呼称を持つものだが、その切っ先はそれほど鋭利ではなく、殺傷能力は低いと言える。見敵必殺のこの場面では少々頼り

ない武器だ。だから、私はそれ自体を武器として使うつもりなどない。

「……安心して。別にそれであんたを刺したりはしない。それを使って、あんたの顔にこんもり絵の具を厚く盛り付けるだけ。今より少しは見られる顔になるはずよ……」

「いや、この絵の具は人体には有毒だからな？　安心なんて出来ないぞ？」

「当然、知っているわよ」

だからこそ、あんたの顔に塗りたくるんじゃない。

「しかし、それにしても……」

冗談を止めにして、溜息を一つ。周の画材道具を改めて確認する。一目見て、学校から支給されている物とは違うのがわかる。種類のそろった絵筆は専用のケースに収めてあり、絵の具の色の種類も、私が持っているものよりずっと多い。

「あんた……。また家から持ち出したの？」

周の使っている絵の具は、学生には似合わない高価なものだ。一般的には販売されていないプロ使用の絵の具。カドミウムやコバルトを含んでいるため人体には有害だが、やはり市販のものとは発色が違うし、色も褪せにくいらしい。

周が言うには、だが。

もっとも、私は絵の具の品質によって生じる、絵の質の上下などを見極める審美眼などない。だけど、素晴らしい美術作品を前にして、何かを感じることは出来る程度の感性は持っているつもりだ。だから、周が描く絵はきっと素晴らしいのだろう。癪なので本人には絶対に言わないが。

「いい加減、天美さんに迷惑かけるのは止めなさいよね？　あんたにとってはお遊びでも、天美さんにとっては大事な商売道具なんだから」

「ひどいなー紫月たん。お遊びだなんて。俺、これでも結構マジでやっていんのよ？　それに、これはくれたの。ほら、僕はできた息

子ですから。親からの信頼の証ってやつ？」

「アソウデスネー。出来た息子の周君は、個展を間近に控えた天美さんのアトリエから、ごっそり新品の絵の具や道具一式を学校に持ち込んでいたな。あと、紫月たん言うな」

「おやおや、そいつは悪い周君だなあ」

周はとぼけた表情で肩をすくめ、苦笑した。

「全く……。少しは反省しろ。天美さんは本当に大変だったらしいじゃない。いざ、最後の仕上げをしようとアトリエに入ったら、仕事道具一式が無くなっているのだから」

「そして、一直線に息子のいる学校に乗り込んできたんだよなあ？」

真っ先に息子を疑うなんて酷い母親だと思わない？」

「いや、当然の判断だ。普段のあんたの素行を知っているなら」

「なんだよー。当然の判断ってー。僕ちゃんのどこが悪いって言うのさー」

「まずその言葉使いを直せ。そして、チャラチャラした服装を正して、そのパッキンの長髪を坊主にして人生を前世からやり直して来い」

「ひどい！ まあ、人生をやり直すウンヌンはともかく、この格好でも別に注意されないのだからいいのじゃね？」

おどけた様子で、余裕たっぷりに周は微笑んだ。左耳に付けている色の褪せたリングのピアスが夕日を反射して鈍く光る。その余裕たっぷりの態度が頼もしいけど、その倍は憎らしい。

私立秋里学園。周と紫月が通う県内でも有数の進学高校だ。毎年、多くの学生が名の知れた大学へ進学していくことから、入学する時点で学生はそれなりの優秀な頭脳を求められている。また、私立であることを生かした独自の実験的な学習プログラムを行っており、それが一定の成果を上げていることから、父兄のおぼえがいい。

部活動や地域活動にも力を入れているが、この学校の本分はやはり学業だ。テストや模試の結果は当然のように、上位五十名の名前は廊下に張り出されるし、優秀な生徒だけで編成された選抜クラスというのも存在する。ようは、公然と成績で学生のランク付けを行っているのだ。この制度に反感を覚える生徒や父兄はいることはいが、実際は少数派だ。この学校は堂々と教育プログラムを世間に公開しているし、そのことを知ったうえで、誰もがここの門戸を叩いたのだ。ある種の覚悟を持って。

しかし、逆を言えば、この学校におけるイデオロギーは『テストの点さえ良ければそれでいい』である。極端に言えば、テストや模試の結果が良ければ、授業に出なくてもいいのである。もちろん、ほとんどの生徒は真面目に授業を受けているし、自主的な勉強にも励んでいるのだろう。だが、どんなことにも例外があるように、ほぼ授業を受けなくても、常に成績上位に位置する生徒がいるのも事実だ。

九条周はそんな例外的な学生の一人だった。

周の肩までかかる髪は脱色を繰り返しかえし、金髪よりも白金と言った方がわかりやすい。今は絵を描くためか、後ろで無造作に結わえている。そのため、彼の左耳のピアスがひどく目立つ。学校指定のタイはだらしなく緩め、ブレザーの袖は乱暴にまくってある。ブランド物ベルトには無駄に鎖の多いシルバークォレットチェーンを付けている。よれよれのスラックスは腰履きしており、履いている学

校指定の内履きは踵を踏み潰していた。正直、おしゃれかだらしないかは微妙なラインだ。だが、進学校であるこの学校ではかなり珍しい格好なのは間違いない。誰がどう見たって真面目な生徒の格好には見えない。実際は、多少着くずしてそれなりに見える格好をしている生徒は何人かいるが、どれも彼ほどの本物の『不良』はいない。

それに、周はその格好に伴って、精神性もかなりの『不良』だ。まず、ほとんど真面目に授業を受けたためしがない。当たり前のように遅刻してくるし、授業に出席していても、その大半は机に突っ伏して寝ているか、周りのクラスメートと無駄話に興じていたりする。登校すらしてこない日も多々ある。彼が雀荘や、パチンコ店に出入りしていることは、教師も含め、周知の事実なのだ。それに、夜中に駅前の繁華街で顔を赤くして歩いている周の目撃情報や、彼が酔っ払った大学生と喧嘩になり補導されたなど話題は事欠かない。いわゆる素行不良。問題児。

当たり前だが、周は学校の先生にはおぼえが良くない。だが、ほとんどの先生は彼の生活態度に強く注意はしてこない。つまりは学力。周は授業をほとんど放棄していながら、一学年一クラスの選抜クラスに在籍し、あまつさえ常にテストで上位三組に入ってしまうのだ。彼の待つ免罪符の効力は、この学校においては非常に強力だ。彼の頭脳はそのままこの学校の実績の向上に直結している。学校経営の視点から言えば、周は間違えなく主力商品の一つである。だから、彼を保護するならともかく、切り捨てることはできない。

ただ、周はそんな自身の有能さにさほど関心がないようだ。気に入らなければやらないし、好きなことは他の時間を削ってでも徹底的にやる。そんな信条は、彼のまとう空気に光の粒子を含ませる。周は誰よりも自由で、誰よりも身軽だった。謙遜も緊張も誇張もない彼の性格は、周りのクラスメートには目が痛むほど眩しいらしい。嫌味なほどできる周は、決して嫌われることなく、憧憬の視線を一身に浴びてクラスに溶け込んでいる。

だが、幼馴染である紫月が周に抱くイメージは、他のクラスメイトとは違うものだ。彼女が周を見たときに感じる違和感。それは『チグハグ』だ。周の格好、精神性共に何かが一つづれているように感じるのだ。幼馴染である彼にそんな思いを抱くようになったのは、何時からなのかはわからないのだが。

「それで？　今は何の絵を描いているの？　て、ゆーか。あんたが絵を前にして悩んでいるなんて珍しいわね」

そう言って、私は周の背後にあるキャンパスを覗き込んだ。油絵の具独特の揮発性溶油の匂いが鼻につく。わずかに顔をしかめながら紫月はキャンバスをじつくり眺めた。

不意に、胸に去来した喪失感に戸惑いを覚える。目の前の絵を見て、何かが間違っていると、心が叫ぶ。この絵からにじみ出てくる絶対的な違和感。この感覚は本物だ。なのに、私はその間違いが何処なのか判らない。別に判らなくてもいいとは思えない。だってこの絵は、この絵の題材は――――。

「これって、近所の交差点？　坂の下の方？」

キャンパスの中には見慣れた風景が広がっていた。小高い丘の上から、傾斜のある坂道を見下ろす構図。季節は春なのか、坂道にそって並ぶ桜並木は満開だ。風は吹いておらず、舞い落ちる花びらが、木漏れ日の中キラキラと瞬く。光と影の薄いグラデーション。桜の木自身の木陰に、わずかな光の柱が乱立している。薄皮一枚の現実味を残した、どこか幻想的な絵だった。

周の描く絵はいつもこうだ。陽の光で生まれる影の長さも、普段は気にもとめない電線の弛みも、細かなパーツはいつそ神経質といえるほど忠実に再現している。だけど、最終的に完成した周の絵は、どこか現実味が薄く感じるのだ。決して交わらない現実と虚構。その違いが何なのかを紫月は具体的な言葉に出来ない。だが、感じることは出来る。

綺麗過ぎるのだ、周の絵は。

輪郭が滲む暖かな光で構成された周の世界。肌寒い美術室の中でも、その絵の周りだけは春の陽光を感じることが出来る。澄み切った青い空。ゆっくりと舞い落ちる桜の花びら。この絵の前に立って

いると、陽気だけではない、春めいたにおいも感じてしまう。

だけど、温かい町並みに人の姿は皆無だ。坂道に敷き詰められた花びらは、靴に踏まれ、泥にまみれることなく、その美しさを保っており、坂道はまるで桃色の絨毯を敷き詰めたようだ。

まるで、現実を拒否するように。

「いやな、なんかこの絵に対して、微妙な違和感があるのだよ」
周にしては珍しい、眉間に皺を寄せた表情で、キャンパスを睨んでいる。

「違和感……ねえ」

曖昧に、ごまかすように呟いた。確かに私もこの絵に対して何かを感じたのは確かだ。だけど、この絵に抱いた感情は違和感なのでは到底説明できない。

……強い言葉を借りるなら、この感情は『絶望』だ。何か取り返しをつかない物がこの絵には描かれている気がしてならない。

だけどそれを口にすることは出来なかった。口にしたら最後、何か大事なものが崩れる、そんな気がしてならないのだ。理由はわからない。だけど心の奥、強いて言うなら本能が警告を発している。それに気付いてはならない、気付いたら最後私はきっと後戻りできなくなる。

「とりあえず、現場で見比べればいいじゃない。どうせ帰るときここ通るでしょ？ 私達」

早くこの絵に関する話題を終わらせよう。そう考え、私は毒にも薬にもならない折衷案をだした。

どっちつかず……か。あまり私の好みではないのだけどねー。らしくない自分に、心の中で苦笑した。

「あー……。そうだな。そうしますかー」

そう言って、周は画材道具を片付け始めた。納得のいかないまま、絵を描き進める気はないのであろう。さっきまでの厳しい顔は完全に消えうせ、能天気な顔をして口笛を吹いている。

「そう言えばさー。なんで紫月さんは美術室に来たの？」

思い出したように、周はたずねてくる。

「だから、紫月たんいうなの。まったく……。あんた、今日み

んなど遊ぶ予定があるのを憶えている？」

「もちろん。当たり前だろー？ 明日から中間テストの勉強期間が始まるからな。今日ぐらいみんなで派手に遊ぼーぜ。なに？ 俺が予定を憶えているか確認？ 不安になっちゃたの？ もしかして俺が忘れてこないんじゃないかと？ この、寂しがりやのウサギちゃんめ！」

ゴスッ！ 思わず振り下ろした手刀が、周の脳天で鈍い音を發した。

「いったーい！ 紫月さんの横暴！ 照れ屋さん！」

響いた音のわりには周にダメージはないようだ。むしろ嬉々として紫月をおちよくってきた。勝ち誇った顔がかなりむかつく。見ると振り下ろした右手は赤くなってジンジンと痺れていた。痕が残ったらどうしてくれる。

「うるさい。だまれ。それ以上騒ぐなら今度は喉を潰しにかかるぞ。――― 大体、あんた予定は覚えていても、集合場所と時間はわかっていないの？」

「いや、知らないよー？」

逡巡も恥じらいもない周の返答。

「帰りのホームルームに出席しないからだぞ。とりあえず今から教室に集合ってことでよろしく」

「ん、了解。……てゆーかさ。メール送れば済む話じゃない？」

そう言いながら、ついでのように周はメールチェックを始める。

「……あんたは絵を描いていると、メールや電話に気付かないことが良くあるじゃない」

「んー……そうだっけ？」

「忘れたとは言わせないわよ。前科何犯だったのか数えるのも億劫なんだから」

全く困った奴だ。子供が持つ悪気のない自己中心性。大人に近づけば近づくほどに、磨耗していく無垢な情動。それを周は当たり前のように行使する。まるで出来の悪い弟を持ったみたいだ。

「過去を振り返っても良くないぜ、紫月たん。人間は未来を見て成長する生き物なのさ！」

「過去を振り返って後悔しないってのには賛成だけど、反省しないで同じ失敗を繰り返すのは愚の骨頂なのよ」

「ふふふ、甘いな紫月たん。俺が学習しないとでも？　そうやって怒った紫月たんの顔を見ることは既に俺の生活サイクルの一部に組み込まれているのさ」

「嫌な方向に学習してんじゃねーよ」

繰り出したローキックは、あっさりよけやがった。むき、生意気な。

「ほらほら、じゃれ付いてこないこない、さっさと教室いこーぜ」
そう言って、周は鞆を持ってドアに向けて歩き出した。非常に不本意な展開だがしょうがない。実際、美術室の時計は予想していた時間よりかなり進んでいた。

いそがなくちゃ、そう思い、忘れ物がないか後ろを振り返る。
夕暮れの美術室。秋が深まり、日が沈むのが早いのだろう。さっきまで室内を染め上げていた赤色に黒色が滲み始めていた。

部屋の真ん中には先ほどのキャンバスがぽつんと立っている。薄暗くなり始めた室内で、そのキャンバスだけ春の陽光に溢れいている。

「ちょっと周、絵が出しっぱなしに————」

「あー、別にいいよ。絵は人に見られてこそ価値が」 「わかった」
真っ直ぐ周の絵を見つめる。ああ、なんだ。こんな簡単なことだったのか。胸の中にあった心のしこりがゆっくり氷解していくようだ。

「わかったって何が？」

「違和感の正体」

そう言って、私は絵の中央部分を指差した。坂の上から見下ろす構図。下っていく坂道はちょうど絵の真ん中当たりで十字路に出ていた。サクラの花びらと光の粒子が舞い散る中、そこに一つだけ違

う色が光っている。

赤い光。基本的に淡い色で構成されている絵の中で、異物のように赤い目玉。

「ここ、この交差点。実際は信号機なんて付いていないじゃん」
なんでこんなことを見落としていたのだろう？ 不思議でならなかった。いつそ不気味と言ってもいいほどの禍々しい赤信号。それが我が物顔で絵の中央に鎮座しているのだ。紫月も周も通いなれた道だ。なのに、二人そろって見落としている。そのことがどうにも納得できない。

「……………ああ、きつと夕日の赤のせいだ。そうに、違いない。
「そう……か。ああ……。そうだったな。あそこに信号が建つことはなかったな」

どこか呆けたように周はつぶやく。

「らしくないわね。あんなものを見落とすなんて。そろそろ脳みその衰退期なんじゃない？」

「んー、そうかもね」

気のない返事、自失した周の表情。その目はどこか遠くを見ている。

「……？」

私はそんな周の態度を少し不審に思ったが、軽くなった心はすぐにそれを忘れさせた。

「おい、紫月さん、周。今から教室に行くのか？」

後ろから自分を呼ぶ声に周と一緒に振り返る。

「おーっす。沖君。そっちも終わり？」

こちらに歩いてくる沖君の髪の毛は、まだ湿り気をおびている。

彼が近づくと、学校のプール独特の塩素の匂いがした。

「うん。テスト明けだからね。ミーティングと軽い練習だけ。泳ぎ足りないって顔をしている部員もいたけど速めに解散した。今日はこっちが優先だし」

体に、心地よい疲れを感じているのだろう。目をトロンとさせて、沖は大きく伸びをした。

「なーに？ 部長権限ってやつ？ 沖も大概悪いやつだなあ」

いや、沖君もあんたには言われたくないでしょ。その台詞。

「いやいや、普段は責任って奴を背負っているんだから。これくらいの権限はあってしかるべきでしょ」

「ふーん。どちらにせよ、次の大会で成績を落とすようなら、男子水泳部の部費は容赦なくカットなんでヨロシクウ」

「おいおい、聞きました？ 沖部長。今の生徒会長殿の発言？」

「聞きましたよ周君。身震いしたね。権限振りかざしているのはどっちだよ？ この、鬼！ 悪魔！ 独裁者！ 女帝生徒会長！」

「何とでも言いなさいな。見込みが無いところに投資をしないのは当たり前でしょ？ そうならないように、せいぜい水泳部の商品価値を上げることね。部長さん？」

目を猫のように細めながら、意地悪く発言してみた。

「周。お前の幼馴染はどーしてこう、高飛車なんだ？」

「うーん、いつの間にかツン期にはいつているのだよ。どこでルート選択間違ったのかわからん」

なによ、ルート選択って？ 人をゲームキャラクターと混同すん

な。

「なんだよ、周！。選択間違えんなよ！。このままじゃ紫月さんルートはバットエンドじゃないか」

つーか、沖君。普通にこの話題に乗ってきたわね。

「大丈夫だ。沖、安心しろ！。きつとくるさ……紫月のデレ期が！」

「そうだったな、周！。俺が間違っていたよ。まずは信じることだ。紫月さんに……他者を慈しむ心の欠片が残っていることを！」

何気に沖君が酷いことを言っているのは気のせいかしら。て、ゆーかそろそろこの茶番を止めよう。こいつらほんとくと際限なく調子に乗るから。

「いいか、沖。思い浮かべるんだ！。紫月のデレデレな様を！」

あ、まだこの話題続くんだ。

「了解だ。周！。俺達には妄想……もとい想像力がある！」

そう言って、二人はそろって目を瞑る。顎を上げこころもち顔を天に向けている。意識は遥か遠く、忘我の彼方へ。

あー、男って本当に馬鹿だなあ。

「……うえっぶ」

「……俺は今想像力の限界を知ったね……」

どっちがどの台詞を言ったかは割愛。だって二人ともバットエンド直行コースにご案内だから。

「いい度胸ねえ、二人とも。本人を目の前にしてさあ？」

「ひい！。紫月たんがこわい！」

「いやあ、ちよっとした冗談だよ紫月さん。本気にしないでよー」

「あら、私の中では男子水泳部の部費カットが冗談から現実になりつつあるんだけど？」

「ごめんなさい、紫月様。この通りですから許してくださいまし」
床に頭をくっつけそうな勢いで、沖君が頭を下げる。その横では周が、「えー、沖、弱すぎー」と文句を言っている。

「うむうむ、今回だけよ？。沖部長さん？」

人に頭を下げさせて悦に入っている自分は、我ながら中々イイ性

格だと思う。

ところが実際の話、私の言った部費カットはあながち冗談ではない。生徒会長として学校の運営に携わっているのだ。成績の良い学校のウリとなるような部活動に多くの部費が流れるのは仕方がない。例えば、同じクラスの友達が部長をやっているように、そこに私情を挟むようなことは絶対にしない。沖君のほうもそれを良しとしない人間性を持っている。ようは二人とも友情は大切にしているが、馴れ合いは好まないタイプなのだ。

まあ、そんなことにはならないでしょうけど。

私はちらりと隣で歩く沖君の横顔を見た。背の高いがっちりした体格。整えた眉の下にある目は若干たれている。この目のせいだろうか？ 沖君のまとう雰囲気はどこか緩く、安心できる。

現実には、この頃の男子水泳部の躍進は、すさまじいの一言に尽きる。これまでもそこその成績を残している部ではあったが、記憶と記録に残るほどではなかった。しかし、沖君が部長に就任した途端に状況が一変した。

沖君が部長に就任したタイミング。それは、三年生の先輩達が引退したタイミングと重なる。

それまでレギュラーだった三年生が全員引退し、ベンチウォーマーだった沖君達二年生が表舞台に上がってきたのだ。そして彼らがレギュラーとなってはじめての県大会。そこで披露した記録はすさまじい。

記録を更新した競技は三つ、表彰台の独占したのは二回。それまで県大会レベルでは相手にされていなかった我らが水泳部は、一躍全国レベルの大会でダークホースとして扱われることになった。全国放映のテレビでもちょっとした特集を組まれるほどに世間を騒がす結果となったのだ。

無論、学校内でもちょっとしたお祭り騒ぎとなった。勉強第一の

我が学校でも、スポーツが出来ないよりは出来た方がいいに決まっている。この頃、放課後の屋内プールには男子水泳部の練習を見学する女子学生を多く目にするようになった。水泳部員がプールに飛び込む度に、キャー、キャー、黄色い声援を上げている。

一度、沖君が部員達が練習に集中できなくて困る、と言っていたので、

「じゃあ、部員意外立ち入り禁止にしようか？ 何なら今日からで出来るけど？」

と、私なりの親切心で言ってみたら、

「いや、さすがにそれは悪いよ。向こうも悪気があるわけではないし、大体応援に来てくれている人に、そんな酷い事は出来ないよ」

なんて言いやがった。

？酷い事？ってどういう意味よ？ 少々むかつて沖君の顔をよく見ると、頬が少しにやけていたのを私は見逃さなかった。

そんな水泳部の躍進に肩身の狭い思いをしている人達もわずかながらに存在した。

引退していった三年生達だ。それもそうだろう。彼等が引退してレギュラーの座を後輩に譲ったとたんに水泳部は大躍進したのだ。当然のように、彼らは実力のある後輩を認められなかった器の小さい先輩というレッテルを貼られたのだ。

掲げられたレッテルは様々な憶測を生む。

曰く、男子水泳部の三年生は、練習もせずに先輩権限でレギュラーになっていた。

曰く、自分より実力のある後輩に苛めを行い、部から追い出そうとした。

噂話は縦横無尽に学内を駆けめぐり、人と人との悪意の糸で結び付けていった。悪意を共有した人間は軽い気持ちで残酷に振舞う。まったく関係のない第三者から、向けられる悪意の針。一時期、水泳部の先輩方は文字通り針のむしろだっただろう。

そんな噂話を誰よりも不快に感じ。真っ先に反論したのは他でもない沖君である。

あの日、最早学内では伝説として語り継がれている全校集会が行われた日。

県大会の個人メドレーで優勝した沖君は、賞状授与のため壇上と呼ばれた。壇上に上がった沖は、やおら校長先生の前に設置してあったマイクを取り上げる。あまりにも突飛な沖の行動に、誰もが言葉を失い、思考が停止した。空白の数瞬、このとき不思議なことに誰も彼の行動を止めようとはしなかった。

かくいう私も生徒会長という立場でありながら、見惚れる様に舞

台袖から成り行きを見守っていた。まるでシナリオがある舞台。虚構と割り切れるテレビのワンシーン。

沖君は振り返り、真っ直ぐに全生徒を見下ろし喋り始める。

「僕が今日この場に立てていることは、他でもない未熟だった僕をここまで鍛え上げてくれた先輩達です」

沖君はそこでいったん言葉を区切る。わずかな逡巡の後、一瞬、泣き顔のように彼の顔が歪んだ。軽く咳払いのをして、沖君は話を続けた。

「……いま、この学校内で、非常に無責任な噂が流れていることを僕は知っていますし、みんなも耳にしているはずです。正直、非常に不愉快です。根拠も何もない、憶測と嘘で塗り固められた噂です。どうか、お願いですから、あの噂を信じないでください。何も見えないのに、知らないのに、見ていたように、知っているように話さないでください。お願いします」

沖君は壇上から、生徒達に向けて深々と一礼した。長い沈黙が体育館を支配する。なかなか顔を上げない彼の態度は楔のように、体育館の時間を捉えて離さない。停滞した時間を動かせるのはただ一人であることを、生徒、教師共々、強制的に納得させられている。

沖君と同じ壇上にいる校長先生が、出番を間違えた役者のようにおろおろしている。ちらちらと、舞台袖の私に視線を送ってくるのが煩わしい。恐らくこの状況を止めさせたいのだろう。気持ちはいわゆる私には無理。私は皆が注目している舞台を壊すような無作法な振る舞いはしたくない。なにより、私自身、舞台に引き込まれてしまった観客の一人なのだから。

忘れた呼吸を息苦しさで思い出した頃、突然、沖君は顔を上げた。動き出そうとする時間。張り詰めていた空気が揺らぐ。みんなの緊張が途切れようとするその刹那、狙ったように沖君は言葉を滑り込ませた。

「—————最後に、先輩方、今までありがとうございました！」
「「「ありがとうございました！」」」

沖君の言葉の後に、体育館のあちこちから声が重なる。おそらく他の男子水泳部員の声だろう。再度頭を下げた沖に倣うように、立ち上がり深々とお辞儀をしている。部員達が頭を下げる方向には、三年生達が座っている区画だ。先輩達は呆氣にとられ、虚脱した顔になっていた。

静寂が支配する体育館の中で、パラパラと拍手が寂しく鳴り響く。徐々に、引き込まれるように複数の拍手が音を重ねてゆく。始めはゆっくりと。しかし、身震いするほど加速を伴って拍手の奔流が体育館内で氾濫する。まるで決壊したダムのように。割れんばかりの拍手と歓声が体育館内で反響し、まるで水の中にいるようだ。

耳にへばりついている音の残響が遠近感を曖昧にする。

出来すぎた舞台のような演出が現実感を希薄にする。

まるで水の中から外の世界を覗いている気分。水面から覗く向こう側の世界では、件の先輩達の泣き顔が見える。誤解が解けた喜びからか、許された安堵からか。それとも、ほどこしを受けた屈辱からか。

鈍った思考と感覚が私を包み込む。だけど決して不快ではない。

寒い日にぬるめのお風呂にいつまでも浸かっていたい、そんな気分。ふと、壇上を見ると沖君がいつの間にか顔を上げている。生徒達の喝采を一身に浴びながら、彼は小さく頷いた。

教室に入ると、床にうつ伏せで大の字に寝ている女子生徒がいた。
「……なにをしているの？ ゆっこ？」

「うー、床がちべたくてきもちいーぜ」

「お腹冷えるよ？ つーかその格好で足広げんな。てめーらもチラ見てんじゃねー」

沖君は顔を真っ赤にして、ぶんぶんと顔を横に振って否定する。
しかし悲しいかな。健全な男子高校生の目は、彼のプライドに反して、ちらちらとゆっこの内腿に引き寄せられていく。

反対に、周は臆することなく堂々と見ていやがる。そして呆れるように、深く溜息をついた。

「ゆっこちゃん、一つだけ忠告しておこう。短パンは……反則だ」
まるで手酷い裏切りを受けたかのように、その表情は深い悲しみに満ちている。神の言葉を借りる牧師のように、幼子を諭す老人のように、訥々と周は穏やかにゆっこを諭す。

「いいか、ゆっこちゃん。完成された芸術品には余計な装飾はいらないんだよ。女子高生＋ブレザーの制服。この組み合わせは単純かつ明快な価値観を伴った完成品だ。黄金比で構成されているといってもいい。例外がある？ ああ、認める。認めるとも。確かに、メガネや紺ハイ、ルーズソックスに各種アクセサリ、これらのオプションによって、に多くの価値観が生まれるのは確かだ。ただそれは些細だ。そう、とても瑣末なことではないんだよ。他にも髪型やら、夏服、冬服といったバリエーション違いなども言及できるかもしれない。でもそれを今語ることは、重箱の隅を突つつく事と同義と言ってもいい。やられた方はイライラするし、やっている方も嫌がらせ以外の何物でもない非生産的な行為だ。今言及すべきことは唯一つだ。そう、短パンだ。君達が体育の時間に履いている学校指定の短パンだよ。女子高生＋ブレザーの制服＋短パン……いや、あり

えないだろ？ 価値観半減どころではないよ？ むしろあれだ、悪意さえ感じるね。……だが、大丈夫だゆっこちゃん。まだ逆転の目はある。大丈夫、俺を信じるんだ。簡単なことだ、発想の転換だよ。その短パンに価値を持たせれば良いだけだ。いいかい？ 今の世ではオーパーツとまで言われ、我が高校でも伝聞にのみ語り継がれるリサールウェポン……ブルマを手に入れグガキイ！ フェ……」

半ば予想していた展開だったので、後ろからげん骨で周の後頭部をぶっ叩いた。瞬間、変な音が周の口から響いた。生理的に受けつけない、本能が忌避する音に体温が一、二度下がる錯覚に陥る。

恐る恐る周を見ると、勢いで舌をかんだらしく、顔をしかめ口元に手を当てている。注意してよく見ると目尻がうっすら涙がたまっていた。隣で一部始終を見ていた沖君も痛そうな表情をしている。

まあ、確かに聞いただけで鳥肌が立つような嫌な音がしたし。実際、私もその音を聴いた瞬間、「あ、やりすぎちゃった……」って思ったし。いつもは軽口で言い返してくる周は黙ったままだし。

……あ、痛みに堪えられないのか、周がその場で膝をつく。白金の長髪が俯いた周の顔を隠し、どんな表情をしているのかわからない。

—————。教室が嫌な静寂に包まれる。沖君は心配そうに周の顔を覗き込んでいる。立場的に加害者である私は、謝るのにも弁解するのにも微妙に自尊心を刺激してしまい、その場を動けずにいた。ちなみに、ゆっこはこの事態を気にすることなく、目をトロンとさせ、半ば夢の世界に移住しているようだ。そのマイペースさ加減、心底羨ましい。

しかし、やっぱり私が謝るのがスジだろう。たとえ、どんなに周がセクハラ発言をしたとしても、怪我をさせていい理由にはならない。うん、まあ、正直心のそこから謝ることは出来そうもないけれども。一つ私が大人の対応をいたしましょう。

「ごめん、周。やりすぎちゃった。大丈夫？」

周の肩に手を置き、顔を覗き込む。しかし、周は私の視線を避け

る様に顔を逸らした。

やばい、周の奴本気で拗ねてやがる。こんな反応されるのは久しぶりだ。小さい頃ガキ大将だった私にいたずらされた時、周はよくこんな態度をとっていた。口には出さないが全身で不満を訴えている。ちよっかい出されるのは嫌だが、かといってほっとかれるのも嫌だというどっちつかずの心模様。正直、幼かった私達は苦笑しながらも扱いに困っていたのを思い出す。懐かしい記憶が喚起され、自然と口調が優しくなるのを感じる。

「ごめんね、周。まだ痛む？ 機嫌直して？」

周のほほに手を当て、優しくこちらに顔を向けさせようとする。しかし、周はむずがる子供のようにいやいやと首を振って向き合おうとしない。

「……ごめん、周。謝るから。こっち向いてよお」

普段の自分からは考えられない甘い声をだして、周のほほに顔を近づける。

「……本当に悪かったと感じている？」

ボソッと、私の目を見ないまま周が呟く。

「うん、もちろん。だから、ね？ 機嫌直して？」

てめーも反省する部分が多分にあるだろーが。と、言いたい衝動をぐっと堪えて笑顔で応える。

「じゃ………して……す」

「うん？ 何々？ よく聞こえないよ」

途切れ途切れに聞こえてくる周の言葉を良く聞き取ろうと、彼の口元に耳を近づけた。

「じゃあ、チューしてくれたら機嫌直す」

「何言ってやがる！ この万年発情猿があ！」

激情に任せて、周の顎を拳で打ち抜いた。先ほどよりもいっそう破壊的な音が教室に響く。盛大に机や椅子を巻き込みながら後ろに吹っ飛んだ周は、口元に手を当てて芋虫のように床で悶えていた。

「うお、マジいてえ！ ガチだガチ！ 今度はガチで舌を噛み切り

そうだったんですけど？ 紫月たん！ 乙女が全力でアッパーカッ
トを行うのはいかなものなのかなあ！」

「うるさい。黙れ。喋れるな。呼吸するな」

腹立たしい。周の悪ふざけもそうだが、それにだまされて優しい
言葉をかけてしまった自分がおいつそう腹立たしい。

「全く……。なんでこいつはこんな性格になっちゃたのかしら」
小さい頃は、もう少し素直な奴だったのに。

「いやあ、紫月さんが甘やかしているからかと……」

それまで黙って成り行きを見ていた沖君が全くもって理解不能な
発言をする。

「はあ！？ 何言っちゃっているわけ？ 沖君は？」

「……いやあ、だってねえ……」

「無駄だよ、オッキー。紫月は自覚ゼロだから」

見ると、いつの間にか仰向けからうつぶせの状態に移行していた
ゆっこが頬杖を突きながらこっちを見て言った。

「なによ、ゆっこ。私のどこが自覚ゼロだっていうのよ？」

「いやあ、そんな質問が出る時点で自覚ゼロってことじゃないすか
？」

「む……」

ゆっこの言葉の意味は分かるが、結局、私が何に対して自覚ゼロ
となのがわからない。明らかにしたいけど、何かが癪に障る。例
えば、一步引いた位置で私達二人を見ている沖君とゆっこの表情と
か。なによ、その微笑ましいものを見ているような表情は。微妙に
上から目線を感じてちよっと不愉快じゃない。

「まあ、いいわ……。いや、決してよくはないけど。とりあえず急
ぐわよ。カラオケの予約時間に間に合わなくなっちゃう。おら、起
きろ周。いつまでも痛がってんじゃねーよ。男でしょ？ 一応」

いまだに床で悶えている周を引っ張り起こす。足腰に力が入らな
いのか、周は私の肩につかまるように立ち上がった。先ほどの私の
拳は綺麗に周の顎先を打ち抜き、程よく周の脳みそをシェイクした

ようだ。

「ほら、しゃんとしなさい。自分の足で立つ」

「いや、紫月たんが元凶だからね？」

「自業自得。言い訳するな。男だろ」

「紫月たんは、もう少しおしとやかに女の子らしくするべきだと思う……」

「……二人ともー。今日は周のおごりだって。遠慮なく騒ぐわよ」
くるっと、百八十度急旋回をし、後方にいた二人に声をかける。
私という支えを失った周は、再度無様に床に伏した。

「ちよっと、紫月たん？ 俺はそんなこと一言も言っていないよ？」

「お、ラッキー。ごちになりまーす」

寝っころがっていたゆっこが無駄に捻りを加えながら飛び起きる。
「ほらさっさと歩こうぜ。財布が遅れてどうするの」

沖君も鞆持ってすでにスタンバイ。自然な風に自分の立ち位置を
有利にするその嗅覚はさすがだ。

「俺、お前らが友達だということが、激しく疑問なのだが……」

「あらあら、なぜか財布が喋っているわ。不思議なことがあるもの
ね」

さて、財源は確保できたことだし、テスト明けの放課後を思いっ
きり楽しみますか。

三時間後、駅前のファミレスには気怠い弛緩した空気が漂っていた。抑え気味の光源が店内に薄い影を落としている。耳をくすぐるような談笑と、それを縁取る静かな音楽。少し効きすぎと思える暖房に、紫月は軽い微睡を覚えた。

「いやー、歌った歌った。久しぶりのカラオケだったけどやっぱ大声で歌うのは気持ちいいー」

満足そうに喋るゆっこの前には、200グラムステーキのディナーセット。ライスは大盛り、追加でポテトフライとジャンボパフェ、ドリンクバーのお替りは五杯目、見ている人の胸やけを誘う暴力的なラインナップ。

明らかに財布に優しくない。

これだけ食べても崩れないゆっこのスタイルを見ている私の心情は、乙女的に非常によろしくない。

目の前のシーフードサラダをもそもそ山羊のように咀嚼し、ブラックコーヒーで流し込む。

ふと目の前を見ると、周が頬杖をついてぼんやりと外の景色を見ている。気持ち目を細めるようにして、訝しげに、探るような目線だ。いつもなら率先して場を騒がす彼らしくもない態度に少し違和感を覚える。不思議に思っただけの視線の先を追ってみても、いつも通りの夜の街の風景が広がっているだけだった。

「何？ 何か見えるの？」

「ん？ いやあ、なんか眩しくね？」

何を言っているのだろうこの男は。意味が分からず、窓の外風景に目を凝らしてみる。なんら変わらない普段通りの夜の街。特別眩しいとは思えなかった。

「いつも通りじゃない。どこが眩しいのよ」

「いや、だから……。はて、どこなんだろうな？」

どこか納得のいかない表情で、不思議そうに顔を傾ける周。その表情を見て、紫月は少し周りの温度が下がった気がした。心の奥底、普段は目も向けていないほど深い位置から、なにか、得体のしれないものが湧き上がってくる。目を背けるように、あわてて自分の内側から目をそらした。

「さーて、そろそろ帰るべーよ」

「そだねー、明日も早いし」

ゆっこの提案に沖君が同調する。店内の時計を見ると、まだそんなに遅い時間には感じられない。正直まだまだ遊び足りないが仕方がない。この二人は朝練があるから早起きなのだ。

「うっし、じゃあ帰りますかー。ほら周、会計よろしくー」

「「ごちになりまーす！」」

「本気で払わせるんだね、君たちは……」

自宅近くのバス停に降りると、夜の湿った空気が肌にまとわりついてきた。その後、電車通学のゆっこと沖君とは駅前で別れ、バス通学の周と私は、ちょうど駅前のバス停に停車していたバスに乗ったのだ。

ちょうど坂の頂上にあるバス停から、見下ろす形で私と周の家が見える。向かい合うように立つお互いの家はどちらも煌々と暖色の明かりをともししており、私達二人の帰りを待っているかのようだ。

そして、私たちの家のさらに向こうに続く坂の底には、白色に輝く街灯の点線が十字に交わっている。ただ、そこには赤色の光を放つ信号機は存在していない。その事実には、私は露骨に安堵感を覚えた。

「ほら見なさい周。あの十字路に信号機なんてついていないじゃないの」

十字路を指さしながら、二人で坂を下っていく。私たちが住んでいる住宅街はめったに車が通らないのでとても静かだ。夜の澄んだ空気を胸いっぱい吸い込む。その冷たさとかすかに聞こえてくる

虫の音が、普段意識しない秋の深まりを思い出させた。

「んー、そうだねー、やっぱりおれの記憶違いかー」

あっさりと自分の間違いを認める周の声は、少し遠くから聞こえた気がした。横を歩く彼の顔を盗み見る。何も読み取らせまいとする、無機質な表情がそこにはあった。何かを隠している、それはわかるのだが、あえて踏み込んで聞くことはできない。幼いころは距離を感じなかった彼我との差は、年を経るごとにひらいていく。今はそれが少し残念だった。

「それじゃあね、明日はちゃんと学校に来なさいよ」

自宅の門扉に手をかけながら周に声をかける。

「おー、気が向いたらねん」

「あんたね……。そんなことじゃ、大人になったとき後悔するわよ？」

「大人になったら……ねえ」

周の声のトーンが一段下がる。振り返ると、嘲笑うような酷薄な表情で周は私を見ていた。

「紫月さんはどんな大人になりたいのかなあ」

「どんなって、……正直まじめに考えたことないわよ」

嘘だ。私にだってぼんやりとだけど、なりたい大人像はあるような気がする。が、そんなこと気恥かしくてとても言葉にできない。それに。

「それに、いつかは必ず大人になるんだから」

空々しい台詞が、夜の冷たい空気を一層冷たくした気がした。

『いつかは必ず大人になる』、いつから私はこの言葉に希望以外の感情を持つようになったのだろう。いつから私は。

「そういう周はどうなの？　どんな大人になりたいの？」

こんなに憶病になってしまったのだろう。

「俺？　そんなの昔から決まっているじゃん」

「え、嘘。何々、何になりたいの？」

思ってもみななかった周の返答に少し焦燥を覚える。周は目を猫のように細めながら笑っている。青白いに夜の光に照らされた周の金髪は、淡くぼやけて現実味を消失していた。

「紫月たんのお嬢さん」

「……………」

「昔約束したじゃん？ 頑張って働いて俺を養ってね♪」

「あ、あんたねえ……！」

返せ、さっきまでのメランコリックな私の気持ちを返しやがれ。

あのころの約束なんて無効に決まっているでしょ！

「それじゃあ、おやすみ、マイハニー紫月たん」

いたずら好きの悪戯鬼そのままの表情で、周はさっさと自分の家に向かって行ってしまった。

ため息ひとつ、やり場のない気恥ずかしさを鎮めるように気怠く夜空を見上げる。

夜空はいつものように、目を潰さんばかりの満天の星空だった。

~~~~~

見慣れているけど違和感たっぷりの自宅の玄関に立ち尽くす。自宅という自分の匂いが染みついているはずのテリトリーにいるのに全く安堵感が得られない。

硬く冷たいドアノブを掴む。

その先の広がっている風景に恐怖し、周は、目を閉じたまま玄関を開けた。

## 壺

バスから降り、顔を上げると、覆いかぶさるように灰色の雲が迫ってきた。しまった、帰るころには雨が降るかもしれない。燈火は心の中で軽く舌打ちをした。鼻につく空気の匂いの湿っぽさに確信を覚え、一瞬、通学路の途中のコンビニで傘を買うことを考えたが、尻ポケットに入っている小銭入れの軽さを思い出し、濡れても構わないと自分に言い聞かせた。

バス停から駅前のアーケード街を抜けた先に、燈火の通う高校はある。普通に歩いても十分かそこらで到達できる距離だ。腕時計で現在時刻を確認した燈火は、意識してゆっくりと学校に向かうことにした。

日の光を遮る曇天は、秋のアーケード街を廃墟のように装飾する。あまりにも薄暗いからだろう。朝の時間帯だというのに、ほとんどの店内には明かりがともっている。それがあまりにも物悲しいからだろうか、行き交う人々はみな一様に口を閉じ黙々と歩いていた。自意識を排除して何かの義務のように流れる人の波。そこに燈火はそっと紛れ込む。アーケード街に流れるあまりにも場違いな明るい音楽に、白けた気分を助長させながら。

「おっす、燈火。おはよーさん」

正門前で後ろから声をかけられる。振り向くと同じクラスの沖凱斗が手を振りながら歩いてきた。

「おはよー、凱斗。なんだい、今日は学校に来るのが早いじゃん」横に並んだ凱斗に軽い調子であいさつを返す。

「おー、今日さ、朝礼当番なんだよ。めんどくさくね？」

「そりゃ、めんどいな」

それでも律義に朝早く登校してきている友人に対して、心の中で苦笑する。おちゃらけようと必死に振る舞っているが、根っこにあ

る責任感の塊はどうしようもないらしい。それがまた凱斗に絶妙の愛嬌をもたらしているのだ。それは少し滑稽で、少し悲しく感じてしまうけれども。

凱斗とは、高校一年の時に同じクラスになってからの知り合いだ。最も、頻繁に話すようになったのは二年に進学してからだ。それまではお互い相手のことを風景とと思っているかのようにはふるまっていた。それは相手が嫌いだからとかの話ではなく、自分と相手との間にある、見えない境界線を強く意識していたからだ。ステージが違う。二人とも同じ教室で過ごしてきたが、きっと別々の方向を向いていたのだ。それは決して悪いことではないと思うが、必然、二人の視線は交わることはなかった。

目線を変えたのはどちらだったのかは、今となってはわからない。僕かもしれないし、凱斗かもしれない。もしかしたら、二人とも目線を変えた先に相手がいたのかもしれない。

だが、目線を変えたきっかけは覚えている。ちょうど半年前、二年生に進学してから一か月たった、ゴールデン・ウィーク前に起こったあの事件だ。

最も、あの事件の話を、当事者だった凱斗の前では絶対に話せない。それは、彼を貶めることになるからではなく、憐れむことになってしまうからだ。

## 式

凱斗と一緒に教室に入ると、暖房が効きすぎているらしく、温かいというよりは暑いぐらいだった。

「ちょ、暑すぎね？ まーた、誰かが設定温度をいじったのだから」  
凱斗は悪態をつきつつ、エアコンの設定温度を下けている。確かに、コートを着たままだと汗ばむくらいだ。僕は窓側の自分の席に向かいながら、手早くダッフルコートを脱ぎ始めた。

コートを脱ぐと体感温度的にはちょうどいい。秋の湿気を含んだ温かい空気が、体を包み込むようだ。まわりつくように眠気を誘うこの感覚は、朝、自分の体温で温められた布団にくるまっているのと同じだ。

よし、朝のホームルームまであと十五分。自分席で気持ち良くまどろんでいよう。

そんな怠惰な決意は、自分の席の隣にいるクラスメートを目視した瞬間に急速にしぼんでいった。

「おはよう。光野さん」

一応、クラスメートとしての礼儀で朝の挨拶をする。機械的に、最低限の単語しか使っていないけど、まあ、それはしょうがないと思う。だって。

「……………おはよう」

あちらは明らかに嫌々に、嫌悪感たっぷりなんですもの。前を向いたまま、目も合わせようもしない。全身からは、『アンタキライ』オーラがバシバシ出ていらっしやる。こんな態度を取られたら僕としてもどうしていいかわからない。無視されるのは別に平気だが、嫌われるのは実はあまりなれていなかったりするのだ。

隣の席の光野 聖歌さんとは、凱斗と同じで、高校一年生のところから同じクラスだ。ただ、凱斗と違うところは、一年のころからこ

の関係が続いていることである。

どうやら、彼女は僕のパーソナリティが相当お気に召さないようだ。僕としては、無味無臭の人畜無害な生き方を心がけているつもりなので、そう、易々と他人に嫌われることはないと思っていたのだけれども。どうも、高校一生の時に、同じクラス内で徐々に明らかに僕のパーソナリティが彼女の鼻についたらしい。

一度、面と向かって言われたことがある。

「私、燈火君のその、事なかれ主義で、日和見主義で、敗戦主義なところがすごくムカつくんだよね」

いったい僕はいくつの主義を持っているんだよ！ と、ガラにもなく突っ込みたかったのだけれども、よくよく考えてみれば、どの主義もそれなりに僕のパーソナリティを言い当てているので、最終的には納得してしまい、あいまいに笑っていた僕を見て、ますます彼女は気分を害してしまった。

そんな訳で、先の席替えで僕と席が隣同士になってしまった光野さんは、居心地の悪い思いをしているようだ。

無論、良識のある高校二年生の光野さんは、単に気に入らないからといって、僕に嫌がらせをするような人物ではない。そして、僕は嫌われていようと、実害がないのなら気にしないように努めてしまう。要は現状維持。決して自分からは現状の改善などは行わないめんどくさがり屋なのである。

そんな訳で、僕と光野さんの間には、一定温度の冷たい空気が常に流れている。

いくら彼女の敵愾心を無視することもできて、この場で机に突っ伏して微睡むことができるほど、僕の神経は太くない。

だけとおかしいな。光野さんがこの時間に教室にいることは珍しい。彼女は、確か早朝から練習があるという、女子剣道部所属しているはずだ。いつもは、彼女は朝のホームルームぎりに教室に飛び込んでくる印象なのだけれども。

何かあったのだろうか？　もしかしたら怪我とかしたのかな？

少し気になって、隣に座っている彼女に視線を移すと、思いつきり目が合ってしまった。訝しそうに僕のことを見つめていたらしい彼女は、一瞬びっくりしたような表情を見せた後に、再度、きつく僕を睨んできた。なんで僕のことを見ていたのか気になったものの、とりあえず敵意がないと示すために、あいまいに笑ってみたら、なぜか彼女は気分を害したのか、顔を背けるように反対方向へ顔を向けてしまった。わざわざ頬杖をついている彼女の左手が、僕のほうへ顔を向けないという、強い意思表示のように見える。

あいも変わらずな彼女の態度に、少し白けた気分になりながらも、僕は、この時間に彼女が教室にいる理由に気づいていた。

黒板に書いてある今日の日付から始まるカウントダウン。ちょうど一週間後に始まる中間テストに向けて勉強に励むよう、本日からあらゆる部活動は禁止なのだ。

「なあ、なあ、燈火。今日の英語の課題やってきた?」

いつの間にか、僕の後ろの席に座っていた凱斗が、シャーペンで僕の肩を突っつきながら聞いてきた。振り向くと、彼の机には白紙のノートが開いている。いつものように、僕のノートを写す気満々らしい。

「なんだ、またかよ。やってきたけどあっているかどうかなんて自信ないぞ」

そう文句を垂れながら凱斗に課題をやってきたノートを渡す。無論、本心から彼を非難しているわけではない。あくまでポーズだ。僕は気遣いながら、言葉に気安さをこめている。

「へへ、いつも悪いですなあ。旦那」

凱斗は、悪びれながら、僕のノートを写し始める。彼のこの態度もきつとポーズなのかもしれないと、僕は勝手に想像してしまう。そんな自分が少し嫌になり、僕は彼から目をそらすように、目的もなく自分の携帯いじり始めた。

「ねえねえ、せいちゃん。あの噂聞いた?」

携帯電話でニュース欄をチェックしていると、光野さんの周りに数人の女子が集まってきていた。僕以外には、明るく社交的な光野さんの周りにはこんな風に人が集まってくることが多い。

「えー、何、噂って? どのなの?」

「なんか、見た人がいるみたいだよー?」

「うんうん、私も聞いたー?」

彼女たちの明るい声が教室に響く。いつもなら、積極的に女の子達の会話に加わっていく凱斗は、課題を写すのに忙しいらしい。急かすように、シャーペンを走らす音が背後から聞こえてくる。

「え、誰が何を見たのよー。気になるから教えてよー」

光野さんも、彼女たちに合わせてなのか、なんというか可愛らし



い声で相槌を打っている。その変わり身の早さに心から感嘆する。女って怖え。

「なんかね、出るらしいよ？」

内緒話をするように、女の子の一人が声を潜めた。何となくだけでも。僕は耳をそばだててしまった。あと数秒後に後悔するとも知らずに。

「えー、だから何なのよー」

無邪気な光野さんの声。

「————九条君の幽霊」

光野さんが息を飲んだのが気配でわかる。いつの間にか後ろから聞こえていたシャーペンを走らす音が聞こえない。……僕は反射的に左目をきつく閉じていた。

「おっはよ。紫月たん。一緒に学校いこーぜー」

朝、玄関を開けると、自宅の門扉の前に立っていた周が能天気  
に挨拶をしてくる。

「なんで……？」

あんた、この時間はいつも寝ているじゃない。

「なんでって、仲良しの幼馴染は一緒に手をつないで登校するの  
がルールってもんだろ」

「そんなルールは存在しない」

「ん？ 予定調和か？ いや、それとも形式美かな？」

「どれも違う！」

いや、だからそうじゃなくて。

「……え？ なに？ あんた、この時間から登校するの？ 本気？」

私はあまりの驚きに、言葉がうまく出てこない。そんな私を見て  
周は不満げだ。心なしか拗ねた様な声を出す。

「なんだよー。俺が普通に登校したらいけないってのかよー。……  
もしかして俺ってクラスからハブられている？ 俺って知らない子  
？ ちよっと生徒会長！ あんたのクラスははじめが起きている疑  
いが」

「はじめはありません」

「なんてこった！ 生徒会長が黒幕だー！」

……しまった、話が脱線しすぎた。話を元に戻さないと。この違  
和感、無視をするには気持ちが悪すぎる。

「周、アンタがこの時間に登校するなんて久しぶりじゃない？ そ  
れに登校するにしても大体昼過ぎくらいからじゃない」

むしろ、学校に来ない日のほうが多かったはずだ。

「んー、俺の記憶が確かなら、この時間に登校するのは入学式以来  
だな」

「入学式っていうと……、約一年半か」

「んー、いや、中学の時の入学式以来だな」

「四年半かよ！ あんた、よく学生生活を続けてこられたわね」

「本当だな。俺もなんでかわかんねーよ」

何かが変だ。捨て鉢な周の態度に更に違和感が募る。いつもの周なら飄々としたセリフが返って来るはずだ。

眩しい朝の光に目を細める。冬の到来を感じさせる乾いた空気の中に立つ周は、どこかおぼろげに見えた。

「……何言つての？ あんた、いつも言っていたじゃない。『いつ学校やめてもいいって』」

そう、周は自分の行動はすべて納得して生活をしていたはずだ。それは私を含め、彼に関わったすべての人にとっての共通の認識事項のはず。

「本当に何でそんな風に言ったのかわんねーよ。やれやれいったい何を勘違いしていたのやら」

「……他人事みたいに言わないでよ。自分のことでしょ」

少しお説教じみた台詞を言う私に対して、周は目線を合わず薄く冷たく微笑むだけだ。

「……まあいいわ。早くいきましょ」

「うん。夫婦同伴登校だね。紫月たん」

「意味が分からない。あんた一生学校に来なくていいよ」

「なんてこった！ いきなり倦怠期に突入しちゃった」

————やはりおかしい。理由がわからないが周のテンションが異常だ。はしゃぐほど楽しいことがあったのか、泣きたいほど悲しいことがあったのかわからないが、彼の高揚感を私は確かに感じ取っていた。

坂の上を仰ぎ見ると、雲一つない、青く澄んだ冬の空に、ぽつんと標識のようにバス停が現れる。

まるで空と大地をつなげている楔のようだ。

もしくは世界の境界。

一瞬、ありもしないイメージが私の頭の中から染み出してくる。

あのバス停の向こうには台地が続いておらず、上も下もただ青い空が広がっている。もしも、世界の終わりに気づかずにあの標識を超えてしまったら、真っ逆さまに底のない空へ落ちていくのだ。

永遠に空へと落ちていく自分を想像する。それはきつと悲しいことに違いない。だけど、なぜか落ちていく私は笑っていた。

「で、……あんたは何やってるわけ？」

益体のない空想を振り切るように歩き出そうとしても、隣に立っている周がついてくる気配がない。何故か、彼は進行方向とは逆の坂の下を見下ろしている。しかも笑顔で、オーバークション気味に手を振りながら。

「朝のご挨拶」

言っている意味が分らん。とりあえず、周の目線の先をたどってみる。坂の下、朝の光に照らされた交差点に小さな人影がポツンと一つ、黒い染みを作り出していた。こいつはあの人影に向けて手を振っているように見える。でも。

「交差点にいる子に手を振っているの？　—————小さな子供に見えるのだけど」

そう、交差点に立っているのはおそらく子供だ。横にある郵便ポストより背が低い。周が手を振っているのに気付いているのかどうかはわからないが、こちらに顔を向けている。

目を細める。距離が遠いのか、朝の光が眩しいのか、子供の顔が判然としない。辛うじてわかるのは、おそらく左目に眼帯をしてい

るということだけ。どうやら少し視力が落ちたのかもしれない。視力には自信があっただけに、少しショックだ。

「子供だからどうしたのさ。あいつが俺の親友であることには変わりはないぜ」

「親友って……、あの小さい子供とあんたが？」

「もちろん。そういう紫月さんは、あいつのことを知らないのか？」  
まるで、私があの子供のことを知っているかのような口ぶりだ。

もしかしたら、私が忘れていただけで会ったことがあるのかもしれない。どこか釈然としなかったが、ここ最近の記憶を探る。が、やはり記憶にない。そもそも、遠目からではあの子供がどんな顔なのかわからないのだ

「うーん。やっぱり、記憶にないわねー」

「そっか、報われないな、あいつも」

「は？ いったいどうゆう意味よ？」

周は私の疑問をあっさり無視し、大振りしていた右手をゆっくりとおろしていく。先端を銃に模した周の右手は、ピッタリと件の子供に照準を合わせて止まる。そして。

「……バーン」

周は躊躇なく引き金を引いた。閑静な住宅街に乾いた彼の銃声が空々しく響く。表情の見えない坂下の子供は微動だにしない。

「あんた何やってんの？ 小さい子供に向けて」

「何って、親愛の証し」

まじめくさった顔でくさい台詞を吐く周に、半ば本気で呆れそうになる。何か文句を言ってやろうかと思う前に、周はさらにわけのわからないことを呟いた。

「それと、宣戦布告かな」

周がホームルーム前に登校してきたことで、教室は一時騒然となった。それは仕方がない。周が学校に現れるのは大体お昼ぐらいが多く、さらに、学生食堂で食事だけして帰ってしまうことも多かったのだ。そんな彼が朝の早い時間から教室にいる。それは、珍しいを通り越して、なぜかみんなの気分を不安にさせてしまう状況だった。

当の周本人はそんなクラスメートの反応が甚だ不満らしく、「そんなに珍しがらなくてもよくね？」と若干拗ね気味である。残念ながら周の自業自得なので慰める言葉はない。私はさっさと自分の席について授業の準備を始めていると、なぜか隣の席に周が座ろうとしている。ちよつとまで、そこはあんたの席じゃないでしょ。

「何やっての？ あんたの席は向こうじゃない」

「大丈夫、変わってもらったから」

「……何で？」

びっくりして、急いで教室の中を見回す。昨日まで私の隣の席に座っていた阿部君は、本来周が座るはずの廊下側の席にいた。私と目が合うと苦笑しながら手を振ってくる。その表情を見て、周がだいぶ無理を押し通したことを私は確信した。

「—————明らかに阿部君が困っているように見えるのだけど？」

「えー、そんなことないよう。ちゃんとあとでジュースを奢ることで納得してもらったし」

いや、絶対納得しないでしょ、あの阿部君の表情を見る限りは。主観的にも、たかがジュース一本で成立する取引とは思えない。脅したのか、宥めたのか判然としないが、おそらく前者だろう。不良然とした周の格好は、周囲に圧迫感を与えるのだ。基本、優等生が集まったわがクラスメートに対しては、効きすぎるぐらいだろう。

だけど少しおかしい。周は恰好こそは不良だが、今まで誰に対しても威圧的に接したことがなかったはずだ。誰に対してもオープンで自然体、決して揺るがない自由な精神で飄々としたキャラクター。それが、周に対する周りの認識だ。

何が周のバランスを崩したのだろうか。残念ながら思い当たる節がない。今度それとなく聞いてみよう。それは、ともかくとして。

「それで？　なんでわざわざ私の隣の席にきたのよ」

「教科書全部忘れちった。机くっつけて一緒に見せて、紫月たん」

「あんた……たったそれだけのために席を変えたの？」

あきれた目線を投げかけても、周はどこ吹く風で机をくっつけてきている。下手くそに吹いている口笛がわざとらしい。

「あー、授業が待ち遠しいぜ。早く先生来ないかなー。ね、紫月たん」

「そんなに授業を受けたかったのなら、教科書忘れてくんな」

子犬のようにまとわりついてくる周に調子が狂う。あと、いつの間にかクラス全体から発せられる生暖かい視線が癪に障ったので、とりあえず周を一発叩いておいた。

教室に入ってきたクラスの担任である池上先生は、私の隣にいる周を見て一瞬目を丸くはしたが、すぐに表情をひっこめ、淡々と朝のホームルームをこなすだけだった。確かに、周がこの時間から学校にすることは珍しいことだが、悪いことではない。むしろ学生だったら当たり前のことだ。だけど、勝手に席を変えたのを注意しないのはどうかと思う。遅刻しなかったご褒美に、黙認したのならそれは大いなる間違いだ。

結局、周と私は机をくっつけたまま授業を受ける羽目になった。そんな私たちを、なぜか先生方は好意的に受け止めている節がある。化学の阿島先生（未婚の26歳）などは明らかにわざとらしい声を出して「あらー、二人とも仲好いわねー。先生妬けちゃうなー」なんて言って茶化してきた。妬けるぐらいなら、のしを付けて差し上げますよ。この男。もちろん返品不可ですが。

周と教材を共有しながら授業を受けながら、私はある不可解な事実に気づく。それは、授業を受けるごとに、確信に変わっていき、私を大いに混乱させた。

「なあ、この単語の意味なんだっけ？」

中学レベルの英単語の意味を聞いてきたり。

「えーと、電・動・力……。確か手の形で……」

おいしい、この場合のフレミングの法則は、右手じゃなくて左手が正解。

「あー、これは楽勝。『教育を受ける義務』だろ」  
はずれ。正解は『教育を受けさせる義務』でした。

「……周、さっきから何ふざけてんのよ」

授業中におしゃべりをするわけにはいかない。一般的な社会のルールと生徒会長の肩書が、私のボリュームを下げる。

「失敬だな、紫月たん。こちとら真面目に授業を受けてるっての」



意地を張るように、周は言葉を返してきた。その表情は少し硬い。うつすらと眉間によった皺が、彼が意固地になっていることを告げている。

「真面目について……。あんたがこんな簡単な問題で躓く訳ないじゃない」

あきれた。大方、授業があまりに暇だから、無知なふりして私にちよっかいをかけてきているのだろう。こっちは真面目に授業を受けているのだ。気まぐれで妨害されたらたまったものじゃない。

「あいにくと、これが本来の実力なの」

そう言って、周は楽しそうに笑う。卑屈に、自虐的に。

昼休み前の最後の授業である数学の時間に、私と周は引き裂かれた。理由は簡単。あと一週間もすれば中間テストがあるというのに、先生が抜き打ちでテストをやると言ったからだ。教室ではブーイングの大合唱。けれども先生は素知らぬ顔で、淡々とテストを配り始める。

そんな中で最後まで抵抗していたのは周だった。

「ちよつと先生！ 席を離せてどういうことですか！」

「カンニングできないようにするためだろう。さっさと離れろバカたれ」

「いくら先生でも愛する二人を引き裂くことはできない！ さあ、紫月たん。君も何かいってやれ！」

「さようなら。生活費は毎月ちゃんと振り込んでね」

「えー……三行半すかー……」

周はがっくりと頭を垂れ、ブツブツ文句を言っていたが、しぶしぶ席を離れた。クラス内が笑いで満ちる中、私はテストに向けて微妙な解放感を適度な緊張感で塗りつぶす。

テストが開始されてまもなく、周は席を立った。そして、教壇で教室眺めている先生に向かって歩き始める。右手にはテストの解答用紙。もう、全部解き終えたのだろうか？ いや、いくらなんでも

早すぎる。私は反射的に教室の時計を確認した。やっぱり、まだテストが始まって五分もたっていないじゃない。それに、今見た限りでは――――。

「先生、はい」

「なんだ、もうできたのか九条」

周から解答用紙を受け取って、その場で先生がチェックする。私は、その先の展開を予想して身を固くする。なんで、周があんな行動に出たのかわからない。

チェックが終わったのだろう。先生はペンを置き、周を見据える。そして長い溜息を吐いた。

「満点だ。席に戻っていいぞ。ただし次からはちゃんと授業も受けるように」

教室内にどよめきが起る。「さすが九条」「周くんカッコイー」など、周への賞賛の嵐だ。

そんな中、私は目の前の解答用紙から目が離せない。正確に言えば、隣の席に戻ってきた周を見ることができなかった。混乱している頭の中には喉まで出かかっている台詞が、ガンガンと反響している。

――――周、あんたの解答用紙、何も書いていなかったよね？

## 肆

退屈な授業が終わり、昼休みになると途端に教室の中が活気づく。学食の人気メニューや、購買の売れ筋商品を狙っている生徒たちが我先にと教室を駆け出していく中、沖は机に突っ伏して微睡みの中にいた。

昨日は夜遅くまでバイトをしていたせいか疲れが残っているようだ。体は鉛のように重く、重力に逆らうことさえ煩わしい。まるで水の中にいるようで――――。

数か月前の自分が毎日のように味わった感覚を思い出す。あの時の自分は、ただひたすら“速さ”を求めるだけでよかった。周りもそれを許していたし、自分もそれに満足していた。先輩達から課せられた練習は厳しかったが、終わった後に同級の部活仲間たちと興じるバカ話は楽しかったし。たまの休みを最大限に楽しみつくすことを考えるのも好きだった。家に帰れば温かい食事ができていたし、何より、両親が幸せそうに笑っていた。

不意に生じたフラッシュバックのような過去の憧憬に、沖は齒噛みしそうになる自分を強く律する。良かった、まだ俺には少なからずプライドというものがあるらしい。強がりと分かっているながらも、彼は自分を奮い立たせる。大丈夫、ちょっと休めばいつも通りに頑張れる。だから少しの間、何も考えずに休みたいんだ。眩しすぎる過去も、色あせた現実も、社会に壊された家族も、肩より上にあがらない左手も――――ナニモカンガエタクナイ。

思考が急速に拡散していく。半目の視界がぼやけて滲む。教室の喧騒が遠くから聞こえてくるようになって、心の中が安堵感で満たされ始めたとき、

「……凱斗、寝ているのか？」

自分を呼ぶ友人の遠慮がちな声に、沖は現実を引き戻された。

## 伍

購買から教室へ帰ってくると、凱斗が自分の机に突っ伏していた。彼の生活サイクルを考えると、わずかな時間でも睡眠時間が必要なのもかもしれないと考え、遠慮がちに声をかける。

「おう、燈火。昼食はゲットできたか」

顔を上げすぐ返事を返してきたので、凱斗はどうやら寝ていなかったようだ。ただ、うつすら赤い彼の両目は見なかったことにした。

「おー、ほら、この通り」

自分椅子に後ろ向きに座り、凱斗の机に購買に買ったものを広げる。

「……アンパンとコーヒー牛乳って……。どっかで張り込みでもするのか？」

「そんな訳ないだろう。別に嫌いじゃないから買ったんだよ」

「……この前は、ジャムパンと烏龍茶だったよな？ あれはあれで組み合わせが変だと思っていたが」

「それも、別に嫌いじゃないからなあ」

ちなみに、アンパンもジャムパンも購買では人気がある商品とは言い難い。昼休みが終わっても、必ずと言っていいほど売れ残っている。だから、急いで購買に駆け込まなくても買えるという点で、僕の中での評価は高い。

「でも、好きなわけじゃないんだろ？」

「まーね。あんまこだわるとかないし」

「ま、お前らしいっちゃ、らしいか」

諦めたように笑いながら、凱斗は自分の鞆からビニール袋を取り出した。

「今日は弁当じゃないんだな」

「ああ、今日は朝は起きるのがしんどくてな。だから、家に箱買いしてあるこいつの出番だ」

そう言いながら、凱斗がビニール袋の中身を机の上にさらしていく。小さな箱と、小さな魔法瓶。魔法瓶は、いつもの家で作っているスポーツドリンクだろう。そして箱のほうは――――。

「好きなんだな。チーズ味」

凱斗が弁当を作れなかった日の昼食は、たいていカロリーメイトのチーズ味と決まっていたので、半ば予想通りだ。カロリーも栄養もそれなりに摂取できることは知っているが、育ち盛りの男子高校生の昼食に、それ単品というのはあまりに酷だ。ただ、それを口に出したところで何も解決できないことを僕も凱斗も知っている。

「まあなー。チョコ味とかフルーツ味も試したんだが、やっぱりこれが一番モノを食っている気分になるからな」

「あー、言われてみればわからないわけでもないけど……ただなあ……」

「？　なんだよ。いやに含みのある言い方をするじゃないか」

「いや、別に、誰が何を食べようが基本的に他人がとやかく言うことじゃないし……」

「まどろっこしいなあ。はっきり言えよ。逆に気になるだろ」

「……じゃあ、はっきり言うけど。それって結構匂いきついと思うぞ」

チーズ味のカロリーメイトを加えたまま凱斗が固まる。

「……………マジ？」

「いや、気になる人にはそうじゃないかーっていう程度だ。実際に僕は全然気にならないし……」

「……………でも、気になる人にはそうじゃないんだろう？　そしてお前は心当たりがある。そうじゃなきゃ、お前がそんなことを言うはずがないからな」

おお、なんとという洞察力。

「いや、本当に大したことないんだよ。凱斗がそれを食べた日は、決まって光野さんは少し強めに香水をつけ直しているみたいだから。匂いが気になるんだろーなーって」

ちなみに、別の女子は凱斗がいない間に、あたり一面に消臭剤を吹き付けていた。さすがにこれを知ったら凱斗は気に病むだろうから言及しない。

「むー、聖歌ちゃんは気になるのか。悪いことしたなー」

眉間にしわを寄せ凱斗が呟く。ここ数か月の付き合いでわかってきたことだが、凱斗は他人を嫌な気分にするのを極端に嫌う男だ。軽い雰囲気で、おちゃらけているように見えるが、常に人一倍周りに気を使っているのがわかる。

「いや、別に光野さんはそこまで気にしていないと思うけどね。それに、嫌だったら言うてくるでしょ、彼女の場合」

例え凱斗の事情を知っていても、光野さんは言うべきことは言う人だ。それは、決して凱斗を見下しているからではなく、あくまで同じ立場で話しかけようとしているからにすぎないのだが。

「それはそうだな。聖歌ちゃんはそこらへんを公平に扱ってくるし。まあ、でも、今あるストックが切れたら次はフルーツ味を買うことにする」

そう言って、凱斗は残りのカロリーメイトを口に放り込み、スポーツドリンクで一気に流し込んだ。

## 陸

「うーっす。おはよーさん」

まったりとした時間が流れるお昼時に、時間感覚のおかしい挨拶をされた。声の聞こえた方に顔を向けると、派手目な雰囲気的女子ゆっこがクラスメートに挨拶をしながらこっちに向かってくる。

どうでもいいが、盛大な遅刻だ。本人は全く気にしていないようだが。

「おー、おはよー」

「おはよーさん。っーか、なに？　今登校してきたの？　まーた、夜遊びしてたのかよ」

凱斗が呆れたように声をかけても、ゆっこは特に気分を害した様子はなく、カラカラ笑っている。

「おうよ！　昨日はかなり盛り上がってさー。なんてったって、地元球団の若手選手だったからね。例え二軍でも貴重でしょ。金払いもよかったし。オールに突入は超余裕ー」

そう言いながら、彼女は机の上にコンビニで買ってきたであろうハムサンドを取り出していく。

「うっわー。燈火聞いたか。この女、男を肩書きと財布だけで区別してるぞ。あー、やだやだ。これが、ブランド志向の女は」

「うっせー。文句があるなら、自分の価値を上げてからこいや」

凱斗が混ぜっ返すように、因縁をつけ、それに対してゆっこがキツイ言葉を投げ返す。はたから見れば、一触即発の空気を醸し出す非常に険悪な雰囲気だ。

もったも、二人にとってはあくまでじゃれあっているだけで、本気で相手を嫌っているわけではない。それでも、こうして顔を突き合わせるたびにいがみ合うのは、おそらくお互いが相手に対して同族嫌悪を感じているからだろう。

図らずも二人の共通の知人である燈火には、この頃になって気づ

くことができた。同時に、二人はお互いを鏡に映る自分に見立て、自己否定していることにも、だ。

さて、そろそろ二人からは聞くに堪えない悪辣な言葉が飛び出すようになってきた。そろそろ止めると致しますか。

「はいはい。そこまで、そこまで。二人とも相変わらず仲良しだなー」

「はあ？ 何言っちゃっての？ 目、大丈夫？ 私と凱斗が仲良く見えるのなら眼科行った方がいいよ」

「そうだぞ燈火。俺とこいつは敵同士だ。それを仲良しなんて言われるとさすがに心外だぞ」

二人にとって、割って入ってきた燈火のセリフがあまりにも心外だったのだろう。言葉の矛先を燈火に向けてくる。

しかし、二人の意識をそらした事で燈火の目的は達成している。なので、あとは適当に対応するだけだ。

「うんうん、そうだねー。ところで、ゆっこのそれ昼食じゃないの？ 昼休みもうすぐ終わっちゃうけど」

そう言って、燈火は机の上に放置されたままのハムサンドを指さした。

「え？ マジ？ うお。あと十分しかないじゃん。くっそー、凱斗が因縁つけるからよー」

「喋ってないで、いいから食べよ」

凱斗も不満げだが、ゆっこの食事時間を削ってまで言い合うつもりもないらしい。まあ、楽しいから続けていたかっただろうけど。燈火は心の中で苦笑する。

今の凱斗にとって、ゆっこは数少ない本音をぶつけられる相手だろうから。こんなこと言ったら、絶対に凱斗は怒り出すだろうから決して口には出さないけれども。



## 漆

「それはそうと、何でこんな時間に登校してきたの？」

ゆっこが昼食をものの五分でたிரけたのを見計らって、燈火は話しかける。

「あー、今日はサボるつもりだったんだけど気になることがあってさー」

「気になること？」

「あー……、いや、昨日な。……その」

言いたいことがあった割には、ゆっこは口をモゴモゴ動かすだけで、なかなか本題を切り出しては来ない。

おかしい。今まで燈火はゆっこが発言を言いよどむ場面なんて見たことがない。

良く言えばあけっぴろげ、悪く見れば無神経なスタンスなのがゆっこだ。そんな彼女が、サボろうとしていた学校に来てまで確かめたかったことを、何故か口に出せずにいる。

そのことが、逆に燈火と凱斗の興味を引いた。

「なんだよ。気になることがあるんだろ？ 勿体つけていないでさっさと見えよ」

さっきまでの言い合いの余韻があるのか、凱斗が少し乱暴な口調で促している。

「まあまあ、凱斗もそうせつくなよ。午後から学校に来てまで確認したいことなんだ。漏れが無いように慎重に言葉を選ぶことはいいことだと思うよ」

燈火はやんわりと凱斗をたしなめながら、そっと、ゆっこの退路を塞ぐ。あくまで自然に、しかし強制的にゆっこが喋らざるおえない空気を場に作り出した。

「……昨日の二次会はカラオケだったんだけど、そこでさ、見た気がするんだよね」

「ん？ 何をみたの？」

「いや……、その、たぶん見間違いかと思うんだけどさ」

「だから、何をだよ」

ゆっこのあまりの歯切れの悪さに、凱斗が本格的に苛立ち始めた。その気持ちはわからないでもない。普段から物怖じをしないゆっこが言葉を選んで話をする、何故か隠し事をされている気分になってくる。だからと言って、こちらが苛立って場の空気を悪くするべきではないだろう。ゆっこに悪気がないのは一目瞭然だ。だって、ゆっこの表情はあまりに切実なのだから。

「見間違いかもしれないけど、気になることがあるってこと？」

「うん。まあ、そんな感じ。……正直に話すから笑うなよ。笑ったらぶっ飛ばす」

「そんなことしねーよ。それで？ 結局おめーは何を見たんだよ」  
続きを急かす凱斗を軽く睨むように目をすがめ、ぶっきらぼうにゆっこは話し始める。素っ気なさを装うように。

「昨日さ、カラオケルームは電波が悪くて一回外に出たんだよね、電話するためにさ。そしたら、さっきまで自分がいた部屋の番号が分からなくなって、一部屋ずつ覗いていったんだよ」

「電話で友達に聞けばいいんじゃない？ 部屋の番号」

「だから電波が悪いつて言っただろーが。言われんでもわかってるっつーの。話の腰を折るな。――――で、だ。部屋を覗くつて言っても、要はドアのガラス越しなんだけど、パツと見でわかるでしょ？ その部屋に友達がいるかいなかった」

「まあ、そんなもんなのかもね」

カラオケなんてほとんど行ったことがないからゆっこみたく断言はできない。

「ん、まあ、じっくり足を止めて見る必要はないから、歩きながら部屋を覗いていったんだよ。……そしたらさ、照明が消してある明らかに使われていない部屋に誰かがいたんだよ」

「……そんなの、店員が片付けしてただけじゃねーの？」

拍子抜けしたように、凱斗が合いの手を入れる。ゆっこの今までの話は、出来の悪い怪談のようだ。正直、会話が盛り上がらないばかりか、白けた雰囲気有助長させる稚拙なレベル。今時の学生だっでもう少し怖がらせるように工夫する。

「もちろん、私だって最初はそう思ったさ。—————だけど、ちよっと気になることがあって、もう一度、覗いてみたんだ。そしてたらやっぱり誰もいなかった—————」

「……え？ なに？ これで話しおしまい？」

「あ……うん。まあ……」

唐突に終わったゆっこの話。あまりに要領の得ないその内容に、凱斗もどうリアクションしていいかわからないようだ。場の静寂が耳に痛い。

ゆっこが話したかったことはこれで全部じゃない。燈火の心の中にはそんな妙な確信があった。それを聞き出すために、会話のきっかけを探し出す。さしあたっては、さっきのゆっこの会話の中で気になる表現を二つほど。

「ね、さっきのゆっこの話の中で気になることがあったんだけど、聞いていい？」

「お、いいぞ。何でも聞きたまえ」

誰もしゃべらない停滞した空気を嫌ったんだろう。ゆっこは、オーバーアクション気味に燈火の言葉に答えた。

「何が気になって、もう一度部屋の中を覗いたの？」

「え、いやそれは、さっき見たのが幽霊かもしれないと思ったから……」

「うーん。でも、最初見たとき店員かもしれないと思ったんでしょ？ それじゃ、わざわざもう一度見直す必要ってある？」

「……いやー、ほら、なんか、急に不安になってさ」

おどけるようなゆっこの表情は、何かに怯えているようだ。

「実は、最初から幽霊だって確信していたとか？」

ゆっこの表情が固まる。

何か言葉を発しようとして喉は上下しているようだが、空気を吐き出すだけで音につながらない。

「言っていたよね？ もう一度覗いたら、やっぱり誰もいなかった。つまり、最初からその部屋にいたのは幽霊だって確信していたんじゃないの？」

言うべきことを言って、ゆっこの答えを待つ。後ろの凱斗は黙ったままだ。今のゆっこの表情を見て、茶化すような男ではない。

ゆっこは、苦しそうに眉間にしわを寄せ、虚空を睨んでいた。そして、恐る恐るといった感じに口を開く。

「見間違うはずはないと思うんだ。あいつみたいな格好している奴はそうそういないし」

一言一言がまるで苦行であるかのように、ゆっこは言葉を絞り出す「だけど、間違いない。見間違うはずがない」

それでも言わずにはいられないのだろう。話す苦しさよりも、誰にも話さないでいる苦しさゆっこは負けたのだ。

「あの時私が見たのは、死んだはずの九条周に間違いないんだ」

放課後、周は一人で美術室にたたずんでいた。秋が深まり、日が短いのだろう。窓からは刺すような西日が部屋全体を赤く染め上げている。今はテスト期間だからか、部活動にいそむ生徒達の声は聞こえてこない。赤く染まった無音の世界で、周はどうすることもできないチグハグな感覚を持て余していた。

周はこの美術室に足を踏み入れたことがあるのは、ほんの二、三回のはずだ。それは実感を伴って確信が持てる。だが、自分の記憶ではここには毎日のように訪れたことになっている。その矛盾が気持ち悪い。まるで、自分の記憶を見も知らぬ他人の記憶で上書きされた気分だ。

自分の記憶にまるで覚えがない。記憶の中の自分がまるで他人のようだ。

記憶の中の周はここで多くの絵を描いている。それは思い出せる。描いた絵の題材も、絵の具の付いた筆先の重みも、油絵独特の匂いもすべて覚えていてる。

だけど、それだけだ。

この場所で絵を描いていた時の周が何を考え、何に思いをはせ、どんな気分になったのかまるで覚えがない。記憶の中の自分は、何も感じず、何も考えず、ただ楽しそうに絵を描いているように見えるだけだ。正直、自分に瓜二つの他人を第三者の目で見ているようだ。放課後の美術室で自分そっくりのマネキンを、ただ眺めているだけの自分がいる。そんな光景が頭に浮かび、背筋に怖気が走った。ドッペルゲンガー。

不意を衝くように、そんな言葉が頭の中から浮上してきた。確かに自分に瓜二つのそれを見てしまうと近いうちに死んでしまうことになっていたはずだ。思わず苦笑が漏れる。周自身がドッペルゲンガーを見ても、もうどうにもならないことを知っているのだから。

昨日、出しっぱなしにしたままの書きかけのキャンバスを覗きこむ。夢のようなきれいな世界がそこには描かれている。

だけど、ただ一つ、どうしても拭い取れない汚れのように、耐え難い現実がそこにはあった。

坂の下の交差点の信号機。

この絵には決して描かれないはずの異物。

だけど、この信号機が存在することを周は知っている。

そして、なぜ、信号機がこの交差点に設置されることになったのかも、周は知っている。

キャンバスの表面に、そっと指を這わす。硬く乾いた油絵の具のデコボコの感触を確かめるように。桃色の桜並木をなぞりながら、指を移動していく。指の行きつく先は坂の下 of 交差点。何かを知らせるように、真っ赤に光っている信号機に指の腹を押し付ける。

不意に、このまま爪で、この信号機の絵を削り取りたい衝動に襲われた。

無意識につばを飲み込む。徐々に指先に力がこもっていくのを自覚する。小刻みに震えながら、信号機の赤色に爪を立てたとき、今朝、坂の下にいた少年の姿を思い出した。

無表情で見上げるように周を見ていた少年。だけど、すぎるような真剣さは感じられた。おぼろげだが、周はあの少年が自分に何を求めているのか理解しつつある。

昨日、この絵に描かれていた信号機を認識したとき、周の世界が変わった。

いや、目が覚めたと言っていないだろう。

急激に覚醒した意識は、それまで他人事のように積み重なっていた記憶から、この世界の異常性を認識する。そして、隣にいた紫月の存在が、この世界の在り方を教えてくれた。

なんという奇跡。目が覚めたのに未だ夢の世界に俺はいる。

水泳部を辞めなかった沖、悪い遊びを覚えなかったゆっこ。周の知らない人物が、昨日、当然のように友人として振る舞ってくる。

彼らは全てが満たされている設定なのだろう。陰りがさすことがない彼らの表情は、薄っぺらな人形を見ているようで、人間味が欠けていた。

そして、どうやら俺にも設定が存在するらしい。全ての問題を解くことができず白紙のまま提出した抜き打ちのテスト。もとより自分の学力などそんなものだ。だが、その場でチェックされたテストには、自分の筆跡で正解の解答が書かれていた。

予定調和のように現実が歪められる。この世界は役者が設定を外れることを許さない。どんなに役者がへボでも、世界は自らを書き換えて帳尻を合わせてくる。

ふざけるな。

胸に暗い炎がともったようだ。周の挙動が設定に合わないものなら、世界は即座にその事実を否定してくる。つまり、周の意志はこの世界に響かない。自分自身が世界に必要とされていない、圧倒的な疎外感。それに耐えられなくなって、俺は自ら――――。

いつの間にか、心臓が早鐘のように脈動しており、鼓膜を揺さぶっていた。周は目をつむり深く呼吸してから、注意深く指先をキャンバスから離す。爪の先に多少は赤色が付着したが、絵の中の信号機は健在だった。

この世界は俺を必要としていない。だけど、この世界は俺に優しい。俺がどんなに無能で、失敗ばかりしても、無かったことにしてくれる。しかも、用意してくれる結果は常に最高のものだ。

世界が俺に望んでいることは単純だ。彼女の学生生活に彩りを添える、ただそれだけ。だって世界は彼女のために作られたのだから。見ることが叶わなかった幼馴染の成長した姿に胸が痛い。かつての幼馴染が少年の姿のままにいる意味を考えたくない。

絵の中の赤信号は何かを警告しているようだ。きっとこの絵に信号機が描かれていること自体、この世界にとってバグみたいなものだろう。それが致命的かそうでないかは周にはわからない。

確かなのは、この世界のためには、今ここで削り取ってしまうことが正解だろう。だけど、周はあえてそれをしない。わずかに裂けた世界の傷。これはいつかこの世界を壊すかもしれないのに。

この世界は多分間違えている。この世界を望んだ幼馴染と、この世界に望まれている幼馴染。そのどちらの在り方も、酷く歪で悲しいものだ。だけど、周はこの世界を否定することができない。

あまりにも稚拙で、子供のママゴトのような世界。誰でも一度は夢想したであろう、ご都合主義の夢の楽土。この世界には、悲しみや、苦痛、絶望を伴う悲劇なんて最初から存在しないのだ。だから、周はこのぬるま湯のような世界に漬かっていたい。何も考えなくても、勝手に世界は良い方向に転がっていくのだから。

わかっている。この世界の在り方は、俺自身だけではなく、あいつもきっとダメになる。だけど、今はこの温かい世界で、少し休んでいきたいんだ。だって、この世界には俺が欲しくて堪らなかった物がたくさんある。

それに、俺には次に目が覚める世界が存在しないのだから。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0719y/>

---

まほろばから君を呼ぶ

2011年11月15日03時19分発行